1944年以降の戦没者は約281万人、91%が戦争末期に犠牲

『日本軍兵士―アジア・太平洋戦争の現実』（中公新書）より・・・
日本近現代政治史、日本近現代軍事史の専門家である吉田氏は、膨大な資料に基づき、「兵士の目線・立ち位置」から、無残なアジア・太平洋戦争の現実に迫った。
日本人死者は、310万人（軍人・軍属が230万人、民間人が80万人）に達し、その9割が1944年以降の戦争末期に集中して亡くなったと推算される。
　そのほとんどは戦闘で「名誉の戦死」をしたのではない。30万人を超える海没死、異常に高い餓死・戦病死、そして特攻――。
なぜ日本軍は、このような形での大量の無残な死を招いてしまったのか。

吉田 裕（よしだ・ゆたか）／　一橋大学大学院社会学研究科特任教授

吉田　理由は大きく２つあります。

　全戦没者310万人のうち1944年以降の戦没者は281万人にのぼり、91%が戦争末期に犠牲となっている（吉田裕「日本軍兵士」中央公論、2017年―『東京新聞』大図解「戦没者データでみる太平洋戦争」2021.8.15）。
　軍人・軍属の戦死者230万人のうち、餓死やマラリアなどによる病死が140万人、60.1%にのぼるとされている（藤原彰「飢死した英霊たち」青木書店、2001年―『東京新聞』同上）。
　航空特攻による死者は約4000人、ただし特攻機の命中率11%と高くなかった（『東京新聞』同上）。航空機による特攻を「航空特攻」と呼ぶが、その他、回天（人間魚雷）や震洋（小型ボート）のような特攻兵器による「水中特攻」「水上特攻」があった。私の亡父は一期前までが出陣した回天特攻隊の生き残りである。